孫子甲城軍記三論

十二

2258
36

特
門へ遠13
帽2258
巻9止

池清

繪本甲冑軍記三編巻之十二

目録

川中島大合戰之事
信玄備と道鬼斎尋弥小図
端角豊後守血戰討死之事
穴山伊豆守が備と本社山吉が備合戰之事
宇山岳辺之助小柔と血戰之図
武田義信京産人が備と柴田上図が備合戰之事
武田が後備紋軍之事

山本勘助入道血戦之事
山本勘助討死之図
謙信信玄ガ旗本合戦之事
甲斐旗本合戦之図
上杉謙信弟武田信玄と太刀打之事
謙信信玄を刀打之図

737
甲越

甲越軍記三編巻之十二

川中島大合戦之事

機変測る事なく勳應端多し危きを除んで勝事を制
すると知将とふ武田晴信入道信玄ち上杉ガ機変を欺せ
び諸我入道として再び欺の勁作をとんせしめ諸我い欺
の備と付候しるとなして主帰り中揉謙信ガ軍を君ガ作ふ
遣ひて車懸りと以く頓く突ふ中されひべし上杉ガ旌旗
早晩小勝まく兵黒雲の起るガ如く必死の色彩まは急変神思
魚遊ばされひべしと中ば抑此車懸りの備ち皆二を組ふて
互ふ助け合せ進ま主切る車のぬく揉ぬ抑紙ガ正面ふ敵有り
ともそしふ魚ふ如くふいろ々び脇道へ押寄るガ如し凡武道の日ふ

738

甲越

敵と紛令ふ事と考へ既に突入するに及んでも備へ[illegible]乱てかろ
服よりろくの時に乱るる中略れ共其中に法有て乱るゝ[illegible]
ていうの堅陣と云ども世備と云く多る時に令に事と得ざる
もり指揮に秘密あり各将ある[illegible]で用ひがたき陣法あり信玄
諸家に注進と聞一百れ山本勘助に道鬼と御将机に例に
呼び寄し謙信既に車懸と云て追付味方と切崩さんと謀る
信玄が旗本に勢あり低令対くもあるも大に云うき謙信が陣
法あるべ何とぞ味方に一万弐千の兵弦付ふん追と云報て
合戦と挑んに時切腹も延引せん事を味方に陣法の冒
しきふまじ連に備と変作せん妻と計るべしと仰られべ
山本道鬼に元来武器神通の者あれば異りひとて須更に備

と信一に是大事の備と云て大正の備と侍受る故小見と号
く侍味方備と云う其細密の秘法至て深くの奇術あれば敵
らく見と異なる不あり世時武田太馬介信繁宛山伝豆守信
良が[illegible]めて武田家代の日の九に武田菱の御旗と将軍の幕
と武田太郎義信の備に云られ大将信玄御纏孫子に旗
一本と将机の本小旗せる新の如の大合戦中に良持ぶ
用ふ不の秘法あり扇山本入道に諸士に令一奇兵と云て
先敵小勢に兵の至る人侍に事に諸士の勇戦小なるべ
誠の備乱るあくあるも安して進べ只備の彼れざるして
大事あるに奈也一て令とする内お上板の車懸り迫て
武田が備へと紛要ふや否上杉の先将柿崎和泉守二子紀人

鞭と傾け小旗とうつむけく飯富三郎左衛門尉義隆陣中に備へ
味と聞と突出云歌もなくたゞ一揉に突崩さんと殺氣天を衝て
突かれば飯富三郎左衛門も奮て戦ひの初なれば勇力氣と十倍に
励し聞と揚鎗襖と倒つ〳〵上杉の一陣と突倒さんと両陣互に
鳴を叫び切り突崩さんとせば四方と拂ひ八面に出て戦ひ
爰に彼れ彼方に変化して万卒に向とも〳〵攻戦に勝ら
實に百千万騎の一時に叫くが如く中にも古畑伯耆守廣
清卿右衛門三科肥前守曲淵左右衛門猪子才蔵志村左内丞に
菅谷弥三郎左衛門尉守衆に抽んで兆と侍る者の好き小比に近
付鎗と羅拂ひ切倒し叱声して戦へば上杉の勢の中にも大將紀
氣ある安井八左衛門孫一郎蒲原十郎右衛門尉松岡昭光

中に大將三左衛門尉義長先に進み鎗と羅ぐ事麻と蔴が
如く勇て進んで戦ひ〳〵行時果べき軍とも〳〵ざりける
飯富三郎左衛門も一陣に進み謙信に迫り合引組んと地
迫の内蔭に隠れ士卒と励し両も共に鎗に勝ん路
崩して名せよ力弱へば討死せよ一度も引ぬと思ひ
自ら敵に向りて挑み戦へば本郷後河守乃寺久助上泉
和泉守所兵庫寺尾出後守等も勇と震ひ一度も
引と討死に上杉の陣將小泉安藤守本社越前守二
頭左右に廻り飯富内蔭が勢とさし挑矢石と乱し
穂先孫先とあへ撓田大学平賀久七郎同久八郎三郎
郎左衛門戸田一左衛門等勢小蔭に勇小蔭に

と討事不かの中ふも田村兵庫ら越後より居陣をくと
思んで此度は陣を進入小係安蔵ちが備と信く居しが
其先より大方とおもひ斬やうれば矢張より猶武去
六騎を切倒し弥勇んで羅ら内蒙方より八木下総ら洗と
上く組まる兵弥大ら力ふて皆時を数下総ちが芋て突徳先
と揺切ふ切て落し落るみぬく付入下総ちと落と切倒とまち
本六郎左衛門同六ら支兄弟ら二人と卒て突
くると田村兵庫ら也ふ上原小要下原小掘く戦ひが多勝
ふ原色ふして先く又〜原小平賀久七接まてまち郎彼
三人と突倒と兵庫を又ふ意と得く六ら支と引ふ切て落
と六郎左衛門大ふ怒り捲と拾く兵弥ふ組んと組ふ

見と覆て六郎左衛門が肋と踏る大兵の田村ふ踏られいろぐ
皆時も堪へきるより其ふ逆掉ふ落又体摩ら記ろる其外
上杉武田が兵卒死と顧ど戦ひ〜ぐ小係本左ふ排ふ皆れ
さ〜ふの内蒙後理が侍七郎衛八郎ふ切崩られ右往左往小敗
走と餓富三郎兵衛尉が爆も四度踏小成く崩まんとちると
三郎兵衛尉一豆も引と七騎ふて叩きふく士卒と励し戦へば
横沢郷右衛門三科肥前守曲淵左右蒙門猪子力蔵小記
力ど手〜踏怖へてど戦ひろふ

4 猪角豊後守血戦討死之事

武田左馬介信繁猪角豊後ら昌清が備へ須田左蒙門尉
釈満安田上総介順易山吉玄蕃允祝豊三備の軍爆闘と組

742

甲越

盛

然れども彼は敵に故ち黒煙を立て下より猶先と採へ喰と噴ぬてつき
寄る武田信繁諸角が軍勢を待受くる事かまび同じく鉄砲
と打掛一斉に叫んで討て入る鬨の声鉄砲の響に山谷の間に震
ひ響き神軸を揺かす天地目下に震ふと雖れ地並び地遠
馬蹄喜憂に対合彼面に突合ふ風の光に電光の如く其烈
き事弼んでうもなし武田方中に真尾張守源新
左衛門篠沢勘兵衛小松左右衛門言本藤人弦郎又玄蕃源十郎
玄蕃陽市右衛門山合又郎左蕃つと始め名ある勇将強士共今日
と死物と水よりも早く戦へば安田須田山吉の三将士卒と勇めて
命と義の為に忘れ名と後代に伝へく子孫の耳目に値へよ一騎
もなきと小より南へ地通り西より東へ迫廻く須田と安田と

てを別に別にてを廻り合戦一息に討崩さんと揉にさんで地を
んとに紙後勢を西搦に義と進めれ源頼郎治郎右衛門須
賀但馬守品川久右郎左衛門彼田久右蕃つ唐崎左馬助加く井上波
守長井丹後守同十郎右衛門帝藤左京亮と始め猛将勇士
死人を負と踏越く奮戦と雖れば須田安田山吉が士卒も
勇みを猛り魚川く戦へば武田勢も寡と絶まじと七頭八尾
して戦へども上杉が猛戦に切崩れ脱に崩さんとすと武田左馬
介信繁を信虎の二男信玄が弟にて言風清節古人に恥じ勇
威武器を兄信玄に劣らぬ大将なれば一騎も弱つぶ衆帰と
振く士卒と下知を軍霹靂の如く其烈に敵を突の烈こる
如く守返して挑戦に信繁を知巻威の復に猛勢付る兜と

着し武田重代の縅紺地の法華経の文書くると掛弦しゝ
今日と思ひ定めと思しめしやうや刎解く臺に上げ禮の綿懸ようけて
るの兜鞦よくつる付馬ゆらゝさりゝと引く茶筅と制帽
禮とゆり合せ鞦を成く東西に馳廻る孫の上杉が勢の
中より松本豊助と云る鉄炮の巧を粗寄つと左る水目角と
打よりやうに信繁が服装と打扮び信繁馬に耐得どせの逆撫
に蔵孫ふと堅水を受て首を掻く武田が臣山寺妙心水其鎧
と追蹤る市郎と取返松本と討倒と此時竟に左馬介が使
教ぐ小放を以て諸角を後守も崩る味方と叫きるゝ四角八
方に逆を飛実威の鎧に糟毛の馬に跨り大剣の槍ととぶ比勝
強る安田勢と追捲るゝ血の浪と揚く戦ふ彩勢流石武田に石

と得る剛持られば此逢先に為つ命と倍と者数多く勇勇
安田勢も東西に赤靡ひてどろんくる所に安田須田山吉が脇に扣く
る所唐崎左馬介地井清七郎平賀志摩ちる武田諸角が兵
弓を小廻る筒先と揃へく打る れば武田方打倒さる者又数と
まるば須田安田山吉勢弥勇ゝ一人も残さじと三方より討ほど小
武田諸角が軍勢彩の如く討崩され七裂八裂に成ける彼を
諸角を後に大に怒る郎後二十騎人踏止る敵の真中に乗入て
二度三度に逆迫る北物狂いに戦へば須田山吉勢諸角と引んと戦に
討てるれば中に後る四清支兵に敵と討支麻と羅が如く我
劣も敵て所の麻と変家とも世無弱らで死境と成し逆寄敵
と突落し突倒し勇と震ふく戦へば三十騎人の従兵も多く討死

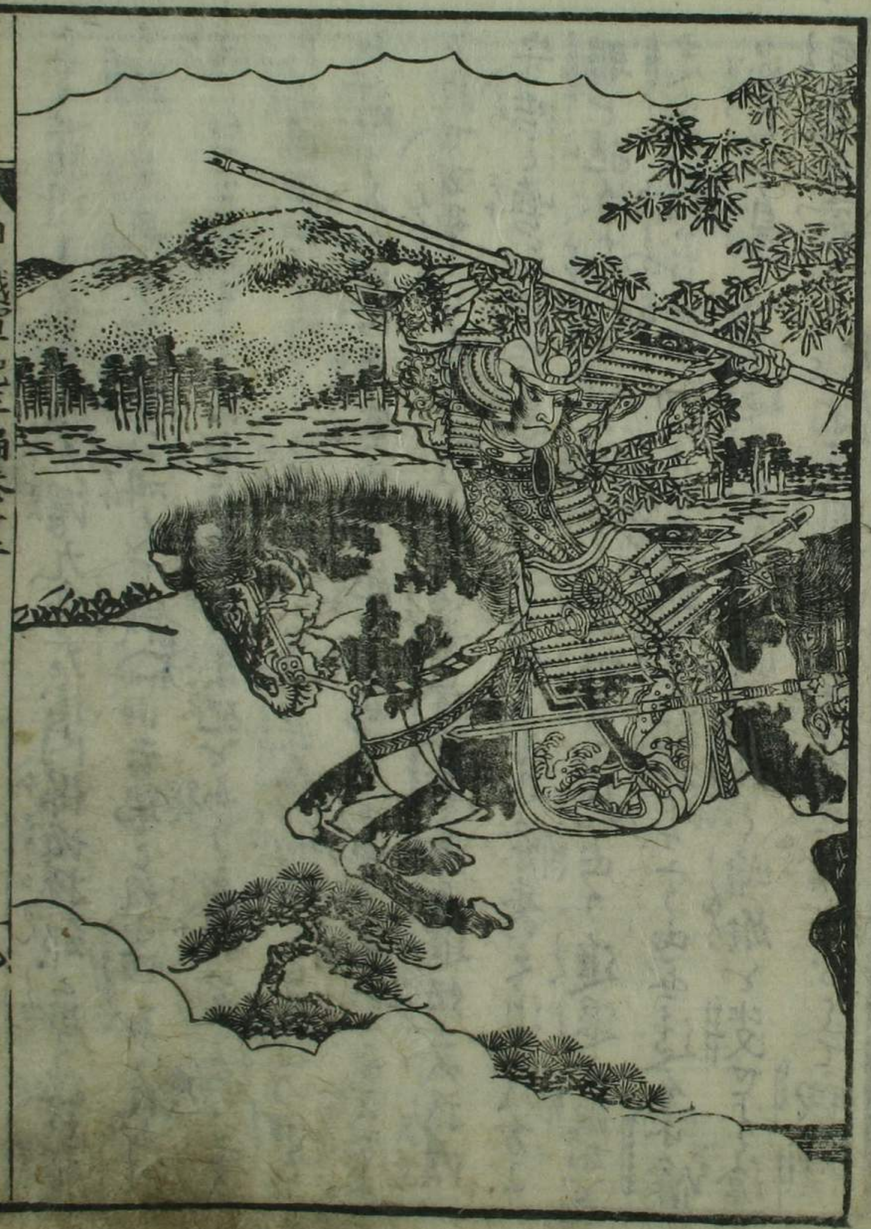
今八十又人の〻馬の左右ホ引ふて戰ふ而〳〵須田が組王置肥前
守石黒又郎兵衛ゝ松添又郎神藤近江ゝ堅田右ゝ元ホ二十騎
士卒百餘人ゝて諸角と取圍ゝ一同小喰と討てゝれば諸角い是と
死期と思ひ定め死出三途ゝ引連んと叫び罵ゝ近寄武者二
騎を切て落し六七人ゝ疲て線で躍上ゝ戰ひしが遂に敵の勇士ホ
つゝいへども敵ケ度の戰ひゝ力尽れ ゝ松添又郎が突ゝる槍と
受接ゞ左ゝ脇腹突通され馬より下ホ喰と落ゝ松が弟縱
深江八左衛門孤勢治郎八ホ三四人馳寄ゝ諸角が首と取て退ん
とゝる所ホ諸角が組石黒又郎兵衛浪人成瀬吉左衛門両人之
首と渡さじと討てゝ羅倒ゝ首と取停ゝ後陣ゝ引
られホ引揚ゝる武田が組の諸隊將赤井左衛門ゝ敵味方共

ゝ打ちあゝ惟押ゝられゝで級を取

穴山伊豆守信君備合戰之事

穴山伊豆守信君の備へゝ左社就家守長山吉兵衛尉元
が軍勢矢鳴と打掛ゝ一揉ゝ突崩ゝ天地と裏ゝ神地と
雷ゝ喚叫ん叫んで討てゝ穴山伊豆守も聞と作り陣先と
揚へ引ゝ引ゝと孤合せゝ砂煙と強ゝ馬と八方ホ馳ゝ切廻
突出駆ゝて命ゝ塵芥の如ゝ羊我と盤石の如ゝ両
軍の勇將猛士ゝ劣ゝ劣ゝと劣ゝ流ゝ血ゝ流ゝ
叱声と拳ゝ戰ひゝ冷ゝき形勢ゝ穴山が組の中ホも保坂
常陸守芦澤伊賀ゝ仕野ゝ兵右衛門馬場八左衛門市川
武兵衛塙津治郎有泉大学義林三郎兵衛佐野内藤宮山

745
甲武



亥道助川を越き丈芦澤九郎右衛門保坂掃部・流之諸れ敵
る敵と突崩さんと喚て叫んで戦ふ山吉物これを切ふられ
痩んでさんべ〳〵うべ山吉玄蕃来配とあり之を鞍笹のめひ上
大音を下知し〳〵る之甲斐あれ者共乱脱備ちる粉の如く
お崩〳〵ふ只平突小突崩せ進め〳〵と四方ふ〳〵で是を励ま
されて百姓寺庄右衛門山吉伯耆守小條秀之進級表掃澤
守唯と喚び短兵急を揉ふる中中も小條秀之進八方を
眼と配り大将宗山を組んと突彼方小弛ぬり進退出没恐と
定めば近ふ敵と切て伏弥敵中を弛入ぐ宗山を道分小條
が働ふと見ふ道分是ふあり妙ふ戦ふ雄雄と変せと槍
取めべく突ふる小條屈風ふ合せ槍とふふて戦ふ程

ふ敵方無双の勇士ふれば乱軍刻軍穂先と電光の如く閃ふ
敬ぐ小戦ふ更ふ勝敗とふふと本部新介を走ふ来ふお討
ぐふ名ふ小條が無ふる馬の前ふと撲ふ雑小捕切ふび
馬ふ暫時もふるべき忽ち刎上ふ喚と倒ふび小條鞍憲
ふ堪得ぬ其逆様ふ落る所と新介弛ぬて秀之進ぐ前と
討秀之進ぐ子小條内通十六歳父の能言退さぐと弛来く
新助と一塗ふ突殺し首と取正ふ道分ふ突ふ
取ふ山ぐ郎後ふ隔られ穿く道分と退得ぐれ内道文
ふ怒りて瞬く間小郎後七人と突伏く引退く其外両撃へ
乱ふ討つ討とつ退り退ふつ弛生と惜ぶ戦ひ〳〵万ふ
在ち郎後変拵津守小烈風の如く高ふ変ひ雑ふる

穴山勢散々に切崩れ浮足に成て敗走と成ぬ
伊豆守信良も引退き系図〜逞兵を励し〜くれば保坂
常陸守信輝兵右衛門塙津治郎に獅子奮震の勢ひを
示し八方に拂ふれば穴山勢是に森て是をふせぐ
主従へ呼応て穴山伊豆守飯富三郎兵衛と二備に成
一度も云〜び〜と立ちらふ

武田義信系集人が備と北条氏康上田が備合戦之事

系集人佐昌勝武田左郎義信が二備に成て北条氏康
上田織理進景国が勢疾風の如く独向ひ鉄炮の音地を震
動の声山を動揺し鬨〜の系集人佐が備武田左郎が備
ともに矢鉄砲一斉に放ち黒煙の内より喚と切て出

中に也も北条氏康が組永井善左衛門と名乗て先駆に
出地を大鹿毛に墨黒に毛の交る袖あり羽織を着
近寄三騎と突落し弥勇んで突進む系が勢甲斐
黒系威の具足に赤の如く赤い兜を目印
に成ぬ一騎に成て上下に乗つ流しの戦ひ永井が力やゆ
一騎に成て突〜落し首を掻く是を戦ひの始〜両軍
猛勢に行と波が如く強弱の鬨声を
獅子の吼る如く天地も崩るゝ迫つ迫れつ戦ふ暫く山岩一時に崩るゝが
如く砂煙に天と霞み遠近の間も見へぬ程に前を取もあつ
て互に血煙を立て鉄砲を一斉に撃ふ是〜〜系集人佐
大音に喚て一励し余と拵て出る敵と突放て一歩も引へきも

我は強けれども力とおぼしく芝先よりとなせ柴田が
兵士と十騎斗切て落と柴村一学油井義介同義を丈夫を
門我一は馬と弛出し人と斬る事一般と羅が如く此声に声無事
武耳と徹しさも旋し柴田勢も一揉に弛倒れんとせしを程
柴田周防守兵士と勇め揉之く猛うれば軍兵等其威風に
うられ柴田を水志弛沼四郎堀江年人勇と雷ふて戦へ京の場
花小弓崩され哭と一奇小崩れ敗走と武田左郎義信
も上田原理と大孔と弛合せ旋の若武者等死戦と踏張
揉合蜜に挑て戦ひ左右武田弛を知ざる郎義信時に二十
歳父小勝らぬ猛将ならば敵小捕付とせんより切死て名とせ
じと合戦の列に加と首と

武田の後備放軍之事

望月三郎信吉武田孫六入道遥弛郎大炊介勝資今福
善内郎秀一濃利武郎惣信善が五備へ古志弛沼る秀景宗
代を矢弛河る宗紀村上左信の射星我清水像安藤守長明加
地安藤守勝重が軍勢雲の音と百千の雷の一奇に驚
の音と百千の雷の一奇に驚ぬ如く弛を呼び弛焼
砂煙血煙と空中小朦朧して人の眼と暗方とも知ぬ其中小刻
妻の関くが如く又と義武矢嵐と問て雲中と牲ひ地と矢
ど村雲と云の中小松本兵郎伝田六郎お田山小遠戸武
勇と雲ふく戦へ上杉勢も猛威と励て死せと情中び強小新勢

今川勢事ども数かゝる大合戦と聞ども此時甚四郎国綱守須田右衛門尉安田上総介上杉勢ゝ間義渡部角兵衛尉ども馳来り三郎道盛弘部大炊介濱利弥一丸濤の如く討懸れば武田三郎弘部を屠り義元の小逞おく〳〵の如く突崩され一同に敗走し上杉勢勝に乗じ逃る敵を追ふ程に武田勢右往左往に追乱され我一に逃方と押ゆ子を捨て助け〻ど家人ゝ多く殺ふに堪ず敵の後に追ふ程に敗北の沉〻ぬ溺れまとろこの地に追詰ゝ討る者又甚数と知ど武田方大敗軍とあり〻ける此時大将信玄が旅本い謙信が旗本に押寄合戦暫時の事なれ共合戦脱に半ばあり其外飯富三郎を信元定武田右衛門と四備ゝ是者と一足も引ど合戦あり

山本勘助入道討死ゝ事

爰に山本勘助晴幸入道は鬼斎ゝ今日寄正の孫墨と謙信が裏と かゝ侍味方ゝ寄陣に裏に敵と受西条山の先手の侍ゝ侍ゝ挟ゝ討んと待る所に諸軍先手に侍ゝ侍ゝ結び討ゝる上ゝ是迄と思ひ定め相続の逞兵弐百騎人と茶後に是者右に狭地に小路と指させ合図と待て狭地と放ち洗と入ゝ合図ゝ候冠完山が備へいまゝ陣へくるゝ敵ゝ一奇に弛出と初鹿泳み郎も先手の敗走と聞く同ゝく逞兵を率ゝ山本小倩ゝ弛出ゝ彰て山本勘助入道ゝ先使へ不端ゝ本城紙糸ゝが勢小行逞と笑ゝく勘助持ゝる狭地と切て放せばやゝまゝ馬武者一騎打て落と見とお

750

岡又山本が後兵弐百餘人一斉に狭地と行を打て放られば敵こなる
本社が先を破らと打倒れ引退て又取て返しとなりあれと云様有山
本が二百餘人狭地を抜倉原迄本社が先小こなる万丹こなる社右郎が傍へ
時と叫んで突て入破行の如く小戦へば万丹こなる勢是小突これ太社右衛門
敗乱を山本勢弟あり山右備第ちが勢対中く亥二亥三小刻て入り
犯境と出して戦へば山右勢もかからずと犯力と尽て戦へども山
本が猛勢に対これて四方路よりもれば本社就第守急こ下知
と伝へ士卒を左右へ組と引せ新ほと探者左右より倉狭と伝
て突急る敵より柴田周防守が勢関と伝て押寄り山本勢と
押色こ鬨に叫んで戦へば山本勢小戦よりも
入れば忽地と後小向い武を別を武を合一子変原て戦へ

敵勢只ち見と時ふが如く敵と対事叶ぬこれ共敵の大
軍なれば引退く対程み天勝こ立ち更加藤右衛門又百騎
郷右衛門と始山本が勇士百十餘人討死と勢小入道
憂こ本社が国と突敵り鎌信が本陣と同小急ぐ近
付旗と変せんと眼と死く四方とこれば鎌信が纏大四まの
日の丸の旗ち本陣近く翻し子お合せと覚しく狭地
勇江関の声高く土煙り一村こ見へられば勢勢馬と乗
く馳る本く柴田ち先に世本周ち水志弱源四郎が勢山本迫
ち小勢小対と時と鬨く突急れば山本入道大こ怒り小賢
き者共と云中と白徒と云中と揺り動と鬨く突くへ
少水と成く戦ふ彩勢ち猛虎の勢羊の間小入が如く驚く周ち

騎馬武者六騎と切て落し敵七十二人を突倒すべき柴田・志弦が勢場場得ごしてをつと追ひ山本勘介をとと叉と弛捲く味方と
ふれば六十餘人討死し今い僅二十餘人ばかり柴田勢山本と討
取らんと付墓ふと勘介屍目ふんぐあしも猛とる三尺五寸
く小ると見て圍よ打上り人馬の息と体へ大猿石敷の勇士あり
勘介遥よ敵とうんとせば上杉勢源の漏ぬく渦ふこくえんれば
さらば家綱の戦ひせんと完貫くして馬引寄て飛ぶて徐く
圍とりられば柴田本社ぐ軍勢是とうるよう引色んで討
取らんと喰と奥く討てうれば山本勘助血よ滴る泥鎗と
閃し柴田本社ぐ勢社中く北声くはく突く入り四面よ出り八
方ふ突入間ふ家更ふ十倍し強声ふ獅子の乳るようふ

騎馬武者八騎と切て落し追ふ車六面勢場と激ふく戦ひ
上杉勢討ふ者多く勘助ぐ士卒も走く討死し勝田山城
金左衛門伊藤長左衛門叉三人の馬のくと離ふ引添て働
く取ふ本社た馬介大ちかと振章弦天のぬく弛まて討て
ふ山本入道泥鎗と下駄ふ搖へ声と思く延まる左る介が後
よう志弦源四郎稲村叉郎三郎馬と駆ぐ七討く奥ふ山本
ぐ後ふう勝田弦橋伊藤の勇士同じく進ぐと志ぼ
くぬ合ひ命ひとうよ戦ふう山本勘介入道と弦
社雲中と弛るぬく柴田と一鎗よ為んと突奥れば馬介ち
道鬼と一刀ふ討く取くんと駭弦の逆流と巻るぬく弛合せ
開き大地と裏して戦ふ取た馬介ぐ後卒江間又郎左叉左衛門

撫合よう助助目岳突りると山本江間が徒と搦人と為たりこと
あると左馬介隙入山本が右の肩先強傷も通れと討仕ふ情む
べし山本勘助是と拂ふ遁ちく馬より落ちと落ちと
又郎を支えて押へて首とど搦へうる情山本勘介信玄
ご三顔と潜く斗窟と出縄四者と迫ひしく武田と捕仕槍名
天下の耳目と集し鬼神とも驚く名将ありしが命数今日尽
川中嶋の命と偏しく多勝田然槍伊藤の勇士も勘介が討死
と見く今と見迫と拉と抱へ討死とり

初鹿源又郎討死之事

初鹿源又郎討死之時山本勘助入道と引添て
純出しが須田右衛門尉が武田左馬介の槍と波う来と
追ふ小槍ちく也遁と等く源又郎猶と等く共先と
馬と隠ゝ也須田が槍み中へ嘶く入り組撫丞曲小戦へば須
田槍中かさりと闘ひ源又郎が討へ入と引色敵ふ血
戦へば源又郎ふ又槍と恐れど也退東へめぐり必死ふ
戦ふ須田槍の亀田丹後本田百作進義西安人と始千古人
命と偏と槍ひる時易し崩れ之波之須田右衛門槍
家下知し槍と入組攻掛れば初鹿槍勇ふと出も大勢と
敵しが其身今石小死と等ざれば討ふ者数多中ふも谷
る九郎ふ須田が家士赤尾源ふ郎猶と合世槍戦ふ
突殺され瀬場平左衛門塚左三左猶門立岡新七等皆孰
軍兵内ふ討死しこと初鹿源又郎牧勇来たりて強迫ふ

て戰ひ互に味方の兵士悉く討死して覺えず續き来る者あらんべ今を見迫ありと北紙に多つて戰ひ騎る七騎

義乘十二人と切倒し須坊郷治郎右衛門が三十餘人を取ちめられ須坊郷と共に出る程戰ひて討死とぞ逢られける

謙信信玄が旗本合戰之事

却説上杉輝虎八道謙信ら車懸りの陣して武田が備へを掛合せ謙信が旗本へ武田入道信玄が旗本小勢合と雲霞の如く鉄炮を放ちとんかつと言程なきまを雄の上杉勢一奇を圍と拳黍小突かる武田が旗本よりも鉄炮を放ち陣鐘声と響し鉄鐘を戰ひ加る弛遠ひ矢炮の響内外

光天地も震ふかと疑る実も奇特の名將ら品謙信公が両一旗ち戰ひ合れば刻し火の熾んなる中を切破り突進一足も退つ追ひつ三回操合しに敵く対容の合戰ありて果べき共へざれば謙信ら武田が先勢の弛付まり我後と殿べ合戰大車かうと拳ぢうひ使者と後陣の直江山城守耳物近にるが備へ崩れ仕る物へ味方働と騎武田とべと引續くみ殺で言逃ると信玄と討後ん車ら出間みありとむと号ち自ら馬に弛迫して諸士と南方見程の敵み支られく進ざるら怯しらら討死と志して殿のよりも大音声みて加し

孫へ次郎梨掃部助同源二郎彩發岡尾弦助宇野左衛門弥次郎鬼小嶋弥七郎媒織部長尾七郎小田切治部丞補上杉

755 甲

弥五郎小室平九郎和田孫長尾新九郎と始め謙信が無双の諸大将の勇士猛物〳〵振叱声天と共に一足も引かず切死せよ〳〵と呼ひ〳〵勇小勇〳〵戦へば武田が旗本の諸将猛士寡と組ふれて大将の御大事なり君恩と報ぜんの世時なり と死と一蓮と変〳〵死戦と成ふ中も金丸平六郎 横田弾河守諸我入道奥矢作守土屋平八郎栗原義三郎 窪田助之丞小山田弥五郎 瀬沼弥助 城中の諸角助七郎山田弥助 吉田左近等と始め強勇無双の勇将強士寡と雲し奥に踏んで歩くかと謙先より必ずと出〳〵て死と成悪戦とれば さ〳〵と旗の上杉勢出陣先と討破まと右往左往と敗北と本陣添へ又百騎繰殿亦宇野左馬介殿止り槍と敵と敵七騎と突く落〳〵

1756 甲

穂先も突折られべたかと掴く切て迫る鬼小路弥太郎 味方の孔ろと〳〵討死〳〵武田勢二十騎人新兵衛と知〳〵討死 其外も数ケ所の手疵と負る退く仏〳〵もあく信玄と高遠へんと進む所武田が旗本本多左衛門二十騎人て追懸れ 先と危く見へ〳〵荒川伊豆守と敵と追る弥七郎と 敵〳〵引組とさんべ武田方猛勢 上杉勢竟に切崩 さん半町作嗜と尚れく敵小七武田勢勝と乗大海の如く追 られべ上杉勢討〳〵者数知〳〵ど突嗜と一騎 繰騎りて大塚村に備へしが旗本勢の崩〳〵とんりう士卒と 知〳〵賜湾〳〵武田が旗本へ嗜と撲合と槍と入る 五二五三と突 まべ武田勢足小突崩られ討〳〵者数知〳〵ど嗜と一騎と崩れ

宇佐美勝よ家七頭八倒して戦へば謙信大よ勇ましく駆出
と守護一攻討程ゆ武田勢或い崩れ或ら踏止り広く小戦ふ所上杉
方ゆ後迫就中守宇佐美と家就山も崩れと一同小槍と入れば
武田ゆ旗本勢先より惣敵軍とぬく崩れると妻彼方ゆ退陣
く敵と討事数度武者共ゆ帰り捲入らま人馬共ゆ浮ぬ流
ぬ流れて命と没と者又めるるど大将謙信ゆ紺糸威の鎧と着
し金の星兜と着給ひ鹿毛の胴肩衣と着放生月毛の
虎の面のぬく ある逸物の馬ゆ乗歩とあて後ゆ懸ゆ出ると
言捨て唯一騎三尺六寸の太刀と接連し先ゆ駆出給へば謙信ゆ
将机備へ大将自ら進出ふ事なれば行くあーも粉ゆべき
我劣らじと接連く真驀ゆ成り太郎義信の使へゆ切て入まで

見時御曹子義信ゆ備も粉のぬく打崩ゆ右往左往ゆ敷乱
去程ゆ上杉謙信ゆ武田信玄ゆ浸り合く雄雄と変せんと心戦
金の兜の毛びゆ緒と切ゆく犀川の深ゆ小打迫白練の絹と広く
鉢巻ゆ移ひ信玄ゆ将机備と目ゆ崩れ逃ふ武田ゆ旗本
の中と押ゆく只一騎先ゆ一文字ゆ駆入後へ旗本の軍兵等謙
信と見てくれば我一ゆ討尚んと競ひつく突かると猛勇の謙
信三尺六寸の大太刀と接連し近付歩と打掃ひ薙ぎ払へ
謙信ゆ前後の近習名と行し人々今ゆ是と思い切大
将の眼前ゆて突く討死せ三位奏爾の如くゆ駆入突倒し
組ぐ落し物狂ひゆ働く其間小謙信ゆ蜘蛛めけて只一騎

信玄が得れをく孤へく孤へど信玄ゑ忍て隠居の老人七八孫同
色の出立なれば何はとゑ減の信玄なりやとゑ孤く生質可あ
き謙信ゑて先年和親の砌信玄が面貌と見くめあれば何をも
中あやかりんと変彼系と求め孤ふ事両三面承大隅守是と
こんく信玄ゑ何事ゑて是ゑ孤ふべきぞ狼狽者ゑといま
謙信目ゑ三度迄繪ゑて突くれど乱軍の中なれば事せうく
く突流ゑと上杉が近習井地峯勘太郎ゑるより主人の大事
と宙と翔く弛ゑく大隅守が遣と三遣ゑせど系ゑ是て突と
なれば寸延く裏かく手小ぶき得ど大隅ゑも意劇の中なり
しかば謙信ゑと思ひ程ゑ當の敵と捨く井地峯小
弦向ふ其間ゑ信玄ゑ其他馬と川ざんぶと系迄孤ふ俄鬼

厮推系なくと罵くりと漕し孤ふと謙信目迅くゑ付却くを
信玄ごごんなりしと突悟しも牧縁ふべき放生月毛ゑ一鞭と
當上躍ゑ也續ゑ川へ系迄孤へば馬ゑ逸物龍の登天ゑる勢力
とゑし水を泳ぎゑる謙信大ゑ声と発し悪くも我ゑ押付と
ゑゑる早怯者謙信也ゑ對面し肢く雌雄と変せゑと云ゑく
信玄が馬近く系ゑるやゑ否馬上ゑる孤先後し小三刀まで切
付孤ふ信玄顧問いるで没ゑ後とゑんとべきぞと軍配扇ゑく
ゑるくと受問孤ふ三の太刀ゑ固扇の柄と切ゑ信玄ゑ
籠を抜ゑへ切迄三の太刀ゑ信玄の肩先へ當ゑ謙信ゑて是
掛く切付孤ふと信玄固和と仮く受問受流孤ふ眺ゑ花
くゑへゑゑる武田方の紋本三十孤川端ゑのゑて是ゑとゑく

甲越
759

是いくと斗拔いんとたれど水を添し　時小八月十日　場合
西條　紀川の張満く早瀬車滝の如く足元定らざれば心
苦ら皆く多小汗と振う牙と噛ぐ者くる原大隅守　武士
源次郎　金九平八郎　後土佐左衛門　号と
早瀬へ馬と乗入源氏方へ出小原大隅守信玄の吉見の柄に持槍
と上く鎌倉が総角と思ふと見上く鳴と突る小鎌倉が槍を
奇代の名器ありが貴よく　表かど大隅守を乗と号ちゑと
槍を叩き伏んと斜と打小打ゆるが打撓して鎌倉が兜の鞠よ
ア馬の組遠よ魚く打強よ放生月毛ち以手ち飛上り川の
深こへ飛の逆瀬へ流きれば鎌倉鞍壷よ堪得ど馬より
逆撥落落へば信玄の馬も是小驚て跳上く渕へ飛へほぐ小

馬上ヨ立ち上り川へざんぶと落落小是と見く上扶方小ち和田
義盛諸馬と乗入大隅守が槍と掴ふく鎌倉と己が馬ヨ乗
其勢ち川ど源氏で岡ヨ上る武田方小八馬の口取信玄と助け
馬と引上く信玄と乗せく右方へ　されぬ弱て鎌倉ち
厚川より上りて弱へ日の丸ヨ武田菱の旗と立ち
ヨ大将と思しく外花威ち槍ヨ白星の兜と着黒き馬
のちく逞ヨ金の馬鎧拵く彼軍と集る体と撲合て脇と見付
太郎ち龍馬助ちと思しければ玄殺ち馬と乗掛け
其ヨ和へ弱ち雑ちぞや大音ヨ問へば彼大将馬と引合せ
是ち信玄ち嫡子武田太郎義信と名乗く二尺八寸ち太刀拔
拔合せ互小馬上の太刀打　二三合ち　討合と双方名誉の

大将なるべき武士なれば馬寄合さびたる共謙
信馬を弛合〳〵打物計寸延る義信の馬の鼻の辺き冠抜弦を
計抜兜の吹返し一郎合十一間不なれば太刀無付馬の透間小落
二間不足せば遂に謙信も草摺辺れ小二間不血と引るるが如
流や水うるん鐙と踏る脱る細あ小るるんせ一歩きの名根
用仍る梁田弥左衛と姫る迄う三三十騎弦付ぶ謙信と交へ刈
謙信も見迫ぶて近付敵二騎切て落一雑兵六人ヨ合と見の
謙信一和田左衛も騎馬の士二騎と切落と程小近付潜
ざる間小謙信も徐く馬と乗り味方計中小入孤小形勢小鬼
神と成る取拉き大将と〳〵と〳〵〳〵る
世時既ヨ武田方大敗軍となる〳〵見川中島大合戦の半端は

る見より次下先ヨ西條山ヨ狩ひ〳〵高坂弾正飯富兵部小捕
馬場民部小捕小山田備中守其利左衛門尉代一徳斎お
木市左衛門尉田下野守が一万武士の勢後べの川中島ヨ決戦矣
叫の吉聞て小孤引返して上杉が後備る宇佐美駿河
守直江山城守が陣ヨ討入る後と襲ひ〳〵武田勢大ヨ勇
る返て再び大合戦と成り両軍の勇将勇士が血戦の次第其
粉ヨ江守が謙信の勇威兵小川中島合戦の評論及び諸説乃
説と悉く記し武田上杉が後日の変蹟小悉く四編ヨ生と

繪本甲越軍記三編巻之十二大尾

京都　速水春曉齋著
東都　春曉齋政信画
攝都　和田正兵衛書

文政八乙酉歲十一月吉日發販

尾州書林　王野屋新左衛門
　　敦賀屋九兵衛
　　秋田屋太右衛門
大阪書林　播磨屋本三郎
　　河内屋長兵衛
　　河内屋茂兵衛
京都書林　伏見屋半三郎
　　伏見屋與兵衛

書林

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同　四日市　山城屋政吉
同　本石町十軒店　英大助
同　下谷御成道　英文藏
同　[illegible]馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
大阪心齋橋通本町角　河内屋藤兵衛
大阪心齋橋筋博勞町角　河内屋茂兵衛